



さいたま市立宮原小学校 学校だより



令和8年8月26日 第5号

学校教育目標

・たがいに努める子(やる気) ・たがいにきたえる子(元気) ・たがいに手をとる子(勇気)

無条件の賞賛

井 上 雅 史

この夏休み中には、熊本地震や千葉県での豪雨など、甚大な被害をもたらす自然災害が発生しています。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。さいたま市でも大雨や大きな地震がありました。この後も35℃以上の猛暑日が継続する猛烈な残暑が続くという予報も出ています。長い夏休みが終わり本日より2学期が始まりましたが、児童の健康、安全に十分留意しながら、学校生活のリズムを徐々に取り戻し、今学期も全ての児童が「やる気・元気・勇気」をもって笑顔で過ごせるように努めてまいります。

さて、私はこの夏休みを利用して、東北方面へ足を運んできました。その道中の福島県で、安達太良山を眺めるひとときがありました。その山の雄大な姿に、私はしばし見入ってしまいました。平野が続く関東で生まれ育った私には、自分のアイデンティティに繋がるような「ふるさとの山」がありません。だからこそ、その地域を見守るシンボルのような山を前にすると、心に深く響くものがあるのかもしれません。

今回は山の麓まで行くことはできず、展望台からの景色を眺めたのですが、その展望台に「ほんとの空の里」と書かれた案内板が立っていました。この「ほんとの空」とは、高村光太郎の詩集『智恵子抄』から取られた有名な言葉です。

智恵子は東京に空が無いといふ、ほんとの空が見たいといふ。(中略) 智恵子は遠くを見ながら言ふ。阿多多羅山(あだたらやま)の山の上に 毎日出てゐる青い空が、智恵子のほんとの空だといふ。あどけない空の話である。

(高村光太郎『智恵子抄』「あどけない話」の一節より抜粋)

高村光太郎といえばこの『智恵子抄』が広く知られていますが、書籍として出版される際、補足として「智恵子の半生」というエッセイも共に収録されました。

…彼女の生前、私は自分の制作した彫刻を何人よりも先に彼女に見せた。一日の制作の終わりにても其を彼女と一緒に検討することが此上もない喜びであった。又彼女はそれを全幅的に受け入れ、理解し、熱愛した。私の作った木彫小品を彼女は懐に入れて街を歩いてまで愛撫した。(中略) 自分の作ったものを熱愛の眼を以て見てくれる一人の人があるといふ意識ほど、美術家にとって力となるものはない。作りたいものを必ず作り上げる潜力となるものはない。制作の結果は或は万人の為のものとなることがあらう。けれども制作するものの心はその一人の人に見てもらいたいだけで既に一ぱいなのが常である。私はさういふ人を妻の智恵子にもってゐた。…

(高村光太郎『智恵子の半生』より抜粋)

この文章からは、妻・智恵子への深い愛情とともに、彼の芸術に対する情熱が「たった一人からの無条件の賞賛」によって力強く支えられていたことが伝わってきます。そして、このことは決して高村光太郎という一人の芸術家に限った話ではないと思うのです。

日々成長を続ける子どもたちにとっても、周囲の大人からの「無条件の賞賛」は何よりの原動力になります。今学期も、子どもたちの「やる気・元気・勇気」を最大限に引き出せるよう、教職員一同、子どもたちを温かい眼差しで認め、教育活動に努めてまいります。